

「もの」社会の社会学的研究

倉 橋 重 史

- 第 1 章 問題提起
- 第 2 章 「もの」とは何か
- 第 3 章 「もの」と人間
- 第 4 章 「もの」社会とは何か
- 第 5 章 「もの」社会の社会学的視点
- 第 6 章 「もの」社会における技術と価値

第 1 章 問題提起

「もの」社会の社会学的研究を始めようとするにあたって、まず最初に問わなければならない点は、次の二点であろう。第一は、なぜ「もの」社会を問題にするのかという点、第二は、それをなぜ社会的にアプローチしなければならないかという点である。

まず前者の問いについて考えてみたい。社会は、多くの構成要素から成り立っている。それは時間的、歴史的に変化し、空間的、地理的に偏在している。その構成要素のなかで、もっとも中心的なのは人間である。人間が社会を作りあげている。そして人間の生存と生活には、「もの」や資源、エネルギー、情報といった他の構成要素が必要である。いわゆる人、もの、かね、といわれるものが社会の構成要素といってもよい。このような社会の構成要素の一つとして、しかも人間の生存と生活にとって不可欠な要素として「もの」がある。われわれ人間は、「もの」を生産し、蓄積し、所有し、交換し、使用し、消費し、廃棄して生活してきた。われわれの暮らしは、食べもの、飲みもの、着るもの、住まうためのもの、入れ物等々の「もの」によって支えられている。歴史的にみると人類の発生以来、「もの」は人間の暮らしにとって不可欠であったといえる。

人類の歴史は、多くの種類の、そして大量の、暮らしにとって好ましい、あるいは質のよい「もの」を作り出す歴史であったといってもよい。あるいは、そのような「もの」の生産、運搬、蓄積等々の技術の発達の歴史であるといってもよい。R.J.フォーブスは、技術の歴史を「物質征服の歴史である」とのべている。¹⁾ 火の使用と石器の製作、くわと土堀り棒による農耕の開始から今日に至るまでの歴史は、「もの」にかかわる技術の発達の歴史でもあった。

とくに、産業革命以降、われわれは生産手段の画期的な改良によって、大量の、多種多様な、しかも質の高い「もの」を生産することができるようになった。それは先進諸国に「もの」社会をもたらした。このような社会では、「もの」にかかわる産業構造、社会構造、流通機構、通商政策、諸制度がみられ、それがますます「もの」社会を展開させている。

現代社会は、このような「もの」社会であるがゆえに、現代社会をとらえるために「もの」社会を究明しなければならない。これが「もの」社会をとりあげる第一の理由である。しかし、今日の社会は「もの」中心の社会から情報社会へ移行しつつあるといわれている。また「もの」離れの社会とみる立場もある。バイオ・テクノロジーやライフ・サイエンスは、いままでの「もの」中心の世界観よりも生命に重点をおいたものの見方をしている。

情報社会とは、「もの」やエネルギーに加えて、情報を重視する社会、情報の役割を強調する社会であり、ライフ・サイエンスは、健康、医療、環境、エネルギーなど広い分野における生命の安全と人類の福祉の発展とに貢献しようとする科学であるといえる。情報社会はコンピュータを中心とした情報、通信技術によって支えられた社会である。歴史的にみれば情報の伝達と処理は、人類の言語の使用に始まり、文字の発明、印刷術の発明、電話やテレビ、コンピュータ、光ファイバー等にかんする技術の発達によっておこなわれてきた。

情報社会の主役ともいえるべきものは、コンピュータであり、ライフ・サイエンスの中心は、分子生物学、遺伝子組み換え技術をはじめ組織培養、細胞融合の技術、バクテリアの技術などのバイオ・テクノロジーといってもよい。これらの科学技術の発達によって、社会は、たんなる「もの」社会でなくなり、「もの」を中心とみる社会観は、すでに過去のものになりつつあるということもできる。しかし、だからといって現代社会から「もの」をとり去ることは不可能であり、コンピュータであれ、バイオ・テクノロジーであれ、「もの」とのかかわりあいを見捨てることはできない。むしろ問題なのは「もの」社会から情報社会、「もの」離れ社会へと推移するプロセスのなかで、「もの」社会がどのように変貌していくのか、一体「もの」社会とは何であるのか、「もの」社会とそうでない社会との関連性は何かという点が明らかでないことである。

とくに「もの」に囲まれ、「もの」によって豊かな生活ができる社会の中であって、人々は、人間と「もの」、「もの」と社会との関連性について関心をもたなかったといってもよい。そして「もの」社会が情報化社会へと推移するにつれて、その関心は、ますます薄くなってきたといってもよい。しかし、すでにのべたように、現代は「もの」社会であり、その上で「もの」以外のもの」の意味なり、それらが果す機能が拡大してきた社会であるにとらえなければ、現代社会を把握することはできないといえよう。「もの」社会の考察はこのような現状を反映しているが故に、今直ちにやらねばならぬ作業であるといえる。「もの」社会の考察なくして情報社会の考察もありえない。「もの」社会の理解は、現代社会の理解のために必要であると共に、変化しつつある「もの」社会から他の社会への推移をとらえるためにも不可欠であるといえよう。

そこで第二の問題に移りたい。それは「もの」社会をなぜ社会学の立場からとらえなければならぬかという点に関してである。それに対する答えはさきの問い、すなわち人間の社会は「もの」社会であること、とくに現代社会は、いままでの社会よりも「もの」社会であることと強く結びついている。社会学の目的は、人間社会の理解にあるといえよう。それゆえに、社会学の研究テーマは人間に集中し、その視点は人間と人間が織りなすさまざまな現象におかれてきた。人間中心主義的思考である。したがって「もの」やエネルギーといった側面は、ややもすれば対象から外された。「もの」、かね、エネルギー、情報の問題は、社会学の主題の外にあるもの、いわば、マージナルなものとして取り扱われ、社会学の研究対象の枠内に入っていなかった。私がかねがね腑におちず思ってきたことは、人間の研究をする人々が、人間と深くかかわりあう「もの」やエネルギーの問題をおきざりにし、視野の外側において深く顧みないようみえるということである。人間は実に多くの「もの」を作り出し、使用し、所有し、消費し、蓄え、交換して暮らしてきた。「もの」の全くない人間の生活を考えることは不可能である。したがって、社会を理解し、人間の行為、人間の生活、文化をとらえようとするとき、これらの「もの」を視界にとり入れなければならない。しかし社会学は「もの」に重点をおかず、これを軽視し、あるいは無視してきた。その証拠に手許にある英語、ドイツ語、日本語の社会学辞典をしらべても「もの」、thing, Ding の項目は見当らない。しかし社会学において「もの」と関連する人間の行為、社会関係にかんする研究がなかったのではない。それは交換理論、経済社会学、文化社会学、技術社会学、生活構造論等々とよばれる一連の研究においてみられる。

交換理論は、「もの」だけをとりあげるのではないが、略奪、競争、協同、愛という四つの社会関係が成立し、持続し、あるいは停止する過程のなかで、「もの」が登場する場合がある。たとえば、マリノウスキーの指摘したクラ交換では貝殻の装身具が贈与の対象となっており、モースの贈与論では、婚礼のごち、装飾品、護符（オロア）と品物、道具類（トンガ）、父方や母方の財産や贈られた「もの」（オタンガ）の霊がとりあげられている。しかしそこで問題になっているのは「もの」そのものでなく、「もの」と関連する、あるいは「もの」を介する交換、贈与という人間の行為であり、相互作用であり、返礼する義務を強制する「もの」がもっている呪術的、宗教的、霊的な力である。

経済社会学においても用具ないし資源として財やサービスなど、いわゆる経済財がとりあつかわれるが、それらは経済的行為の手段としてどのように入手され、使用されるかに焦点がおかれ、「財自体」の分析が主体なのではない。

文化社会学においては、とくにドイツのその場合、A. ウェーバーの理論に特徴的にあらわれているように、物質的文明よりも精神文化に重点がおかれる傾向が強かった。英米の文化社会学や文化人類学においては、むしろ物質文明がとりあげられ、F. ボアスや M. J. ハースコーヴィツなどは、文化に物的対象を含めようとしている。だが、ボアスの場合、物質文化

は人間の自然環境への適用の様式、栄養摂取、発明、経済活動を指し、「もの」自体をとりあげていない。むしろ、F. ラッツェルやF. グレープナーの外的文化財が「もの」を明確にとらえているといえよう。しかし文化社会学や文化人類学は文物や物質文化を文化の一要素としてとらえるもので、文化全般からそれらを独立したものとしてとりあつかうものでない。

たとえば、ラッツェルはメラネシアの弓とアフリカの弓との形態の類似性によって、その発生的な関係を証明し、伝播主義的研究をすすめたが、弓についての研究は、それがどのような人間により、集団により、社会により、いかに作られ、どのようにして社会に伝わっていったのか、それはどのような目的に使用され、その分布は文化の伝播、民族の移動とどのように関係するか、また他の文化要素といかように結びつくのかを問題にするものであり、弓自体、「もの」自体の研究ではない。

技術社会学は、「もの」の資源や素材、「もの」の生産、加工、運搬、移動、蓄積、保存、廃棄という行為や、それらの行為の手段となる道具、機械、装置をとりあげる。しかし、技術社会学の研究は、「もの」が中心なのではない。「もの」や生産手段を生産し、使用する人間の行為やそれらをいかに作り、使用するかという情報が重要なのである。

生活構造論においても、生活を物質的側面においてとらえ、「もの」の購売、所有、消費、衣食住の生活習慣などがとりあげられている。しかし、ここでもさきの諸研究と同様、「もの」を中心とした研究ではない。

「もの」社会の社会学は、それらの「もの」にかんする諸研究に近い立場に立ちつつ、中心を「もの」の方に、より近づけてとらえようとする、つまり今迄の社会学が人間を中心において「もの」をとりあつかったのに対し、「もの」社会の社会学は、「もの」と人間との関係を中心におこうとするものであるといえよう。それではそのような立場からどのように「もの」社会の社会学が展開できるのであろうか。研究は出発点に立ったといってもよい。したがって、ここでは「もの」社会の社会学を構築し、それを展開していく段階に至っていない。むしろ「もの」社会の社会学的研究を開始するにあたって、もっとも基本的、基礎的な問題に焦点をあててみたい。それを一つの試みとして、「もの」とは何か。「もの」と人間、「もの」社会、「もの」と技術、「もの」と価値といった5つの角度からみていきたい。

第2章 「もの」とは何か

「もの」社会がどのような社会であるかをみようとするとき、まず第一に、そこでいわれている「もの」とは何かを明らかにしなければならない。ところが、「もの」とは何かをあらためて問い直すとき、それに対する明確な答えは出てこない。常識的に「もの」と考えられているものと、「ものでないもの」との境界がはっきりしない。また境界がどのような基準で設けられたのかも確かでないことに気付くのである。

これを解くために、あるいは逆に、それは「もの」の意味が、いかに多義的であるかを確認することになるかもしれないにしても、まず辞典の説明をみたい。それによると、広義には「単なる思考の対象であると、現実に存在する事物であるとを問わず、一般に何らかの存在（有）、何らかの対象、判断の主語となる一切のもの。狭義には、外界に在り、吾人の感覚によって知覚し得る事物、感性的諸属性の統一的担手としての個物、時間・空間中に在る物体的・物質的なもの」と説明している。（新村 出編『広辞苑』岩波書店）この説明でも「もの」は、これこれである「もの」という同語反復をまねがれていない。それほど「もの」の定義はむずかしいといえるが、この説明はかなり哲学的であって、広義の説明は意識の対象となるすべてをさし、狭義の説明ではイギリスの経験論的な立場に立つもので、「もの」は感覚により知覚可能な実在的、外在的な事物、個物であり、感覚でとらえられる属性の集合とみられる。しかしこれらの説明では「もの」と「こと」「もの」と「ものでないもの」との境界は必ずしも明確ではない。ラテン語の *res* は *a thing* であり、また *matter*, *affair* である。英語の *thing* も物、物体をさすと共に、なすべき事、事柄であり、また生き物、動物、人をさす場合もある。フランス語の *chose* も事、物品を意味するようにラテン語の *res*, 英語の *thing*, フランス語の *chose* では「もの」と「こと」は同じ言葉でいいあらわされる。

日本語の場合、「もの」は対象的な存在を表わし、「こと」は生起や事行を表わすのに用いられ分化している。佐藤通次の『言の林』によると、「もの」も「こと」も共に擬声語で、谷川清の「事と言と訓同じ相須って用をなす」という『和訓栞』の証明を現象学的に解釈し、『言は意識から切り離された抽象的存在としてのコトでなく、意識現象における対象的契機、すなわちノエマ（思惟されたもの）の性格において捉えられたところの「云々と云う」コト」であり、事物の意味の「物」は、上の事と同じようにノエマ的な「云々と云う」モノであろう』としている。

ところで日本語の「もの」の意味は多義的である。再び辞典の助けをかりると、そこにはさきにみた客体としての「もの」のほか、名詞として10、形式名詞として4、助詞 接頭詞の各々一つを掲げている。名詞としては、① こと、② 事物、③ 世間一般の事柄、④ 言語、⑤ 飲食物、⑥ 楽器、⑦ 鬼・魂などあやしいもの、⑧ 特に取り立てていふべきもの ⑨ 前後の関係で言わなくてもわかること、⑩ 心に思っているもの、があげられている。また「ものいう花」は美女を指し、これに対し「ものいわぬ花」は草木となるように、人と「もの」との関係、すなわち、者と物との関係もあいまいである。（『広辞苑』）

ところでこの点に言及する前に、「もの」の概念を規定することがいかに困難であるかという点について述べておきたい。物質の概念は哲学においても古来から多く論じられてきたが、それを一般的、普遍的に言い表わすことは不可能であるといえよう。なぜなら、「物質とは何かということよりも、哲学の歴史においていかなる物質概念が存在したか」という指摘もあるからである。

物理学においてもエネルギーと物質とはどのように関係するのか、エネルギーは物質なのか否かについて論じられてきた。ニュートンはそれは物質ではないとし、オストワルトはエネルギーこそ物質であると説明した。20世紀に入り、特殊相対論は質量・エネルギーの同等性を主張し、「質量はエネルギーの一つの形であって、物質の特質ではないとし、物質の概念を力やエネルギーを含むところまで拡張する可能性」に道をひらいたといわれている。²⁾

一方、今日まで「もの」と「いきもの」である生物とは異なると考えられてきた。しかし分子生物学は、生物の遺伝情報がDNAという核酸のテープに刻みこまれており、そのDNAが同じ遺伝情報を刻みこまれたDNAを作るという複製のメカニズムを持っていること、DNAに刻みこまれた遺伝情報がRNA（リボ核酸）を介して解読されて、特定の多くのタンパク質がつくられるメカニズムを明らかにした。「この結果、生命現象、少なくとも遺伝現象は基本的に現在の物理や化学の法則で証明されること」がわかった。³⁾ しかしある酵素が蛋白に働いてこのような現象が起こるという形で研究はすすめられているけれども、分子レベルの研究で「なぜそうなるのかということはまだ少しもわかっていない」という指摘もなされている。⁴⁾

このように現代の科学技術は、いままでの「もの」と「ものでないもの」との相異点についての見方なり、その基準をかえ、エネルギー観、生命観にも大きな変化をもたらした。それによって一方で、いままで漠然と「もの」と考えられていた「もの」の概念が明確になると共に、「もの」と「ものでないもの」との境界がさらにあいまいになるという現象も生じてきている。

さて、それでは社会学の立場からみて「もの」と「ひと」との関連性はどこにみられるのであろうか。法的には人は「もの」でない。人格者である人自身が権利の客体になりうるかは問題であるが、人格を尊重する近代法では、人格者および人格の一部分を権利の客体として取扱うことは許していない。人体の一部は法律上「もの」でない。人為的に人体に付着したもの、義歯 義手なども身体の一部とみられなければならない場合は、人体の一部と解される。これに対し、人体の一部でも、たとえば毛髪や血液など、生活体から分離し、社会通念上、独立した「もの」として取扱われ、しかも公序良俗に反しないと考えられれば、それは「もの」となる。⁵⁾ このように人体の一部は、社会通念や社会観念にしたがって人体とみなされたり、独立した「もの」とみなされたりする。屍体が「もの」であるか否かについても「もの」として所有権の客体となるとみる議論と、通常の所有権と異なるとする議論がある。今日問題になっている脳死を人の死と認めるか否か、それを臓器移植と結びつけるかどうかに関しては議論の分かれるところである。これは人間の死とは何か、屍体は「もの」かどうか、死後の人間の臓器を「もの」とみなすか否かという点を今日、日本の医師、病院関係者、さらに社会がどうみるかという見解そのものが問題になっていることを物語っている。

ところで民法上の物の分類は、物理的な性質によっておこなわれるのではなく、社会的、取引上の観念にしたがって分類されている。民法85条は「本法ニ於テ物トハ有体物ヲ謂フ」と定義している。有体物とは、空間の一部を占めて人の五感によって知覚できうような形態を有

する物質である。

これに対して思考上の構象にすぎない権利又は権利の集合は無体物である。ここでも有体無体の区別は物理学上の区分によるのではなく、社会生活における経験法則に従っている。しかしその経験法則は時代により、社会により異なる。

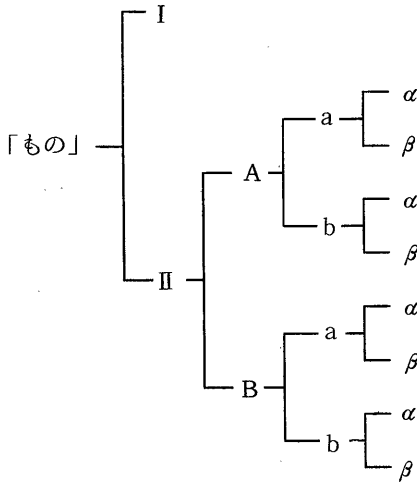
たんなる「もの」が特定の人間にとって、あるいは集団や組織にとって特別の意味をもつことがある。一個の時計が亡くなった親の形見であったり、一本のネクタイが恋人からのプレゼントで特別の思い出をもつものであったりする。「のれん」は商家の営業権をあらわす「もの」であり、また祖先伝来の信用という無体物でもある。このように「もの」は人との関係において「特別のもの」となる。

デュルケムは、聖 (sacré) なる「もの」の特質は「その内的特性 (intrinsèque) に含まれているのではなく、それに付加されているのである」とのべている。宗教的礼拝の対象となる聖なる「もの」もそれを物理的、化学的、鉱物学的に分析してみれば、俗なる「もの」の内的特性と何ら異なるものではない。「宗教的なものの世界は経験的性質の特殊部門ではなく、それはここに重ね合わされているのである (surperposé)」⁶⁾ 聖なる「もの」は、これらの「もの」に対する人間の態度、畏敬の態度によって、禁忌として隔離されている。かくして聖なる「もの」は、聖なる「もの」自体の内的特性から聖なる「もの」になるのではなく、人間がそれを特殊的、象徴的關係からみるので聖なる「もの」となるといえる。

これを敷衍していえば、「もの」の「もの」性も人間のものに対する意味の付加、意味付与によって「もの」となるといえよう。「もの」と「ものでないもの」との区別も、あるいはそれら両者の混同も、「もの」に対して人間がどのように意味を付与し、どのような意味をそれに重ね合わせているかによって左右されるといえよう。そして、このような「もの」への意味付与は、たんに個人レベルにとどまらず、集団や、組織、などの構成員の意識や通念さらにそれを妥当として承認し、それを一般化する歴史的、社会的、文化的背景によって支えられている。

ある時代の「もの」の価値は、その時代的通念によって理解でき、ある社会における「もの」の「もの」化は、社会的に制約されているといえる。つまり、「もの」の「もの性」という意味付与は、それをおこなう主体のレベルによって分けられる。それはいくつかのレベルに分けることができるが、この点については「もの」社会の章で論じたい。

次に、「もの」への意味付与は、それが何を基準としておこなわれるかによって分けることができる。それは主体の側の利害、判断 (意思決定) の基準によってことなる。それは、Ⅰ、主体とかかわりをもたぬ「もの」、無関係な「もの」と、Ⅱ、主体とかかわりをもつ「もの」(ここでは、もののけなど、超自然的なものについてはふれない。) A、価値ある「もの」、プラスの価値をもつ「もの」($A-a$)と、マイナスの価値をもつ「もの」($A-b$)、および具体的な「もの」- α と抽象的な「もの」- β に分けられる。またB、没価値的な「もの」も上と同様に分類すると、次のように構造的に、あるいはヒエラルヒー的にとらえることができ



よう。

そしてこれらの基準は固定的なものでなく変化する。たとえば技術の発達によって、人間と直接かかわりあいをもたなかった物質がかかわりをもつようになったり、あるいはその関係性が認識されたり、没価値的な「もの」が価値的になったりする場合がこれである。したがって、IがIIに、IIがIになり、 $A \rightarrow B$, $B \rightarrow A$, $a \rightarrow b$, $b \rightarrow a$ という転換が起こる。そしてこの変換は、「もの」の有用性、経済性、効率性などをどのようなレベルで判断するかという意味付与のレベルの問題とかかわってくるのである。なおここで抽象的な「もの」の分類をしたのは、今日ハードなものとしての「もの」にたいし、ソフトなもの

としての「もの」がもつ意味、それが社会にたいしてもつ機能、その影響力が大きくなっているからである。ノウハウとか、コンピュータ・プログラム、ドキュメント類を含めたソフトウェア、トレード・シークレット（企業秘密）などがここに含まれる。またM.ポラニーのいう詳述不可能な（unspecifibility）個人的知識もこのカテゴリーに含めることができる。⁷⁾いままでわが国ではこれらのノウハウやコンピュータなどのソフトウェアの保護についてそれほど強い関心がもたれなかった。しかし米国ではそれを保護する意識が強く、先端技術分野での競争と摩擦とからんで知的所有権の保護を前面におし出している。それは、従来知的活動の所産を保護してきた特許や著作権制度自体が現実から遊離するという事実の見直しを要求するとともに、このような抽象的な「もの」としてのソフトウェアの重要性を再認識することが必要であることを物語るものといえよう。

第3章 「もの」と人間

すでに述べたように、「もの」は人間の生存と生活にとって不可欠なものであった。しかし「もの」と「ものでないもの」との区分もさだかでなく、それは人間の意味付与によって異なり、社会的・文化的に制約される関係にあり、しかもそれらも変化するものであった。ここではその点をさらに、「もの」と人との関係においてとらえ直してみたい。

第一は、「もの」と人間との関係にかんしてである。それは、1), 人の「もの」化と 2), 「もの」の人間化の二重の関係としてとらえることができる。1) の人の「もの」化の極端な

例は、奴隷の場合である。2)の「もの」の人間化とは、道具や機械のIE化、ロボット、AI（人工知能）などにみられる。

まず前者の人の「もの」化の現象なり、プロセスについてみる。この現象なり、プロセスは、人間が他者を手段として用いようとするとき常に生じる。Iカントが指摘したように、理性的存在者は「他の人びとを決して単なる手段としてでなく、いつも同時にそれ自身における目的として取り扱うべきである」という法則は、⁸⁾逆にわれわれは他人を目的として取り扱わず、往々にして手段として取り扱っているという事実があることからあえて主張されるといえよう。また奴隷は「生ある所有物」（klēma empsykhon）とみなされた。アリストテレスは道具を生命のないものと、あるものに二分し、後者を奴隷とみたのである。

E.ウィリアムズは、イギリスの産業革命と資本主義の発達で、三角貿易の一端を担った黒人奴隷の血と汗の結晶であることを実証している。「奴隷船は、本国出航時にマニュファクチュア製品を積み込んだ。それをアフリカ沿岸で、ニグロと交換して利益をあげ、ニグロをプランテーションで植民地物産と交換して、さらに利益をあげた。植民地物産は、ついで本国に送られる。」⁹⁾という三角貿易は、イギリスに貿易の利益が集中するシステムになっている。そして、大量の奴隷という労働力を「もの」として貿易に使った背景には、産業革命のイギリスの国家権力があり、資本主義形成の労働力供給体制があり、大西洋の国際分業、植民地経営があった。

また、19世紀のアメリカの奴隷制度を生きた黒人たちの証言をもとにして書かれたJ.レスターの『奴隷とは』には、奴隷が「もの」として考えられるとともに、人間性が拒まれた条件のもとで人間であることを訴えている。「かれらは奴隷ではなかった。かれらは人間であった。かれらの条件が奴隷制度であったのだ。」という指摘は、そのような制度を産む人間社会自体を問うている。黒人の男たち、女たち、子供たちは、「そうするほうが、他の人間たちにとって利益があったから奴隷にされた」のであるという。そのような社会に住む人間の利己主義の犠牲者なのである。¹⁰⁾

奴隷制度は、過去のものではない。今日も、いたるところで人間を「もの」とみ、「もの」として取り扱っている。今日ブラジルのラ・バイクサダ・フルミネンロという市では、金さえ払えば、誰でも殺人を頼めるという。松井やよい著『女たちのアジア』によると、貧困と重労働で早く死んでいくネパールの女たち、マレーシアやスリランカでは、プランテーションで家畜小屋のような長屋に閉じ込められ、低賃金と鞭打ちなどの残酷な体罰のもとで働いている女たちがおり、妻の実家が婚家の要求する持参金（ダウリー）を払わないと婚家が嫁を虐待し、あげくの果ては焼き殺すという蛮行がインドではおこなわれてるという。いたるところでみられるレイプや売春などは、女性の「もの」化、商品化、非人間化であり、その背後にプランテーションやカースト制度、人口問題、貧困、女性蔑視、差別、家父長制的抑圧等々の社会的・文化的問題が存在するのである。

人間は、労働力とみなされ、資本主義社会では労働力は商品化して売買される。K.マルクスが、『資本』の第一篇の「商品と貨幣」において、「もの」としての商品が、資本制的生産様式が行われる社会の富を形成することに注目し、商品（die Ware）の分析から始めたのである。しかし、商品であるとみる「もの」のとらえ方は、すべてを経済的にみる立場であって、「もの」の非経済的側面に注目することも必要であろう。

程度の差こそあれ、われわれは、常々他人を手段と見なし、道具として利用し、使用し、廃棄さえする性向を有している。それは、特定の利己的な欲望充足に走り易い習性、カントのいう傾向性（Neigung）のゆえである。しかし、それはたんに個人的な習性というよりも、歴史的に形成され、社会的に認められ、文化的、意識的に一定の価値を与えられたものとしてとらえることができる。つまり、人の「もの」化の傾向は、個人の背後にある集団や社会 制度 文化の問題としてとらえることができる。

次に、後者の「もの」の人間化の現象ないし、プロセスについて考えたい。マルクスのように、技術の発達を労働手段の発達であるとみれば、「もの」のそれは人間化のプロセスを示しているとみることもできる。マルクスは、「何が作られるかでなく、いかにして、いかなる労働手段をもってつくられるかが経済上の諸時代を区分する」¹¹⁾ とのべた。労働手段としての「もの」の原型は、人間の身体に見出される。人間自身が「ものをいう道具」（instrumentum vocale）であって、奴隷は、ものをいうが故に、もっともすぐれた道具であったといえることができる。また、身体や器官は道具となりうる。指、手、掌、腕等々は、指示器となり、計数器となって用いられる。手が道具の原型であることは、人間が他の動物とちがって直立姿勢ができ、二足歩行ができる動物であるという点から理解される。二足歩行は前肢を手として使用することを可能ならしめる原点であるといってもよい。このように手と指は、道具の原型であるゆえに道具は手の機能を代行する「もの」として作られた。サルが手で道具を使用し、指でかなりの「もの」を操作することができるが、L.ホワイトは、サルが道具を使用するのにたいして人間は道具の使用プラス道具の蓄積と発達があるとのべ、この能力に象徴能力をあげている。¹²⁾ ここに、道具と言語の問題が生じるが、この点についてはすでに述べたことがあるのでここでは言及しない。¹³⁾

人間の手や指は、耐熱、耐酸、耐放射能など生物学的、生理的 肉体的な限界を有している。この限界をこえて手や指の機能を代行するもの、さらに、手や指がもつ固有の力以上の力を出すことができる「もの」として道具や機械、装置がつくり出されたのである。したがって、技術の発達は、これらの手や指の機能を代行する労働手段、とくに、機械をつくる機械の工作機械の発達とみることもできる。しかし、手や指は、あくまでも労働手段の原型であって、労働手段の発達は、各々の時代と社会が必要とする「もの」の需要に応じて発達してきたのであり、社会的、文化的要請に応じようとし、あるいは、それに近づこうとして発達してきたといえよう。だが、技術の本質は、たんにハードとしての労働手段に求められるものではない。

人間は、B.フランクリンのいうように、「道具を作る動物」(a tool making animal) だとか、カーライルのいう「道具を使う動物」(a tool using animal) といわれてきた。たしかに道具の製作と使用は、技術の歴史を支える行為であった。しかし、その前提として、道具を何のために作り、使用するのかといった道具性の発見がなければ道具は作れないし、用いることもできないであろう。つまり、人間は、道具を見出す動物(a tool finding animal) といえることができる。この道具性の発見は、いかえれば、道具とは何かという道具性の意味付与であり、道具にもたせ、道具に担わせる情報の発見でもある。

すでに述べたように、今日の技術はハードな「もの」とともに、ソフトな情報によって支えられているといえるが、「もの」の人間化もこのような人間の知的行動、情報処理の機能を機械に代行させる方向で進んでいる。1949年、MITで最初に開発されたNCフライス盤をはじめとして、1953年には、コンピュータを利用して設計の一部を自動的にこなわせるCADの試みなどは、人間の知能、判断を代行する「もの」の人間化の例といえよう。最近、LSI(大規模集積回路)の技術が発達し、メカトロニクスの分野でこの傾向は急速に進みつつある、現在、製造業だけでなく、ロボットの応用は、しだいに生活、医療等々の他の分野に広まっていている。

「もの」の人間化は、人間のハードな側面における肉体的、身体的、エネルギー的機能の代行と、ソフトな側面における頭脳的、知的機能、さらに精神的な多機能の代行とに分けてとらえることができるが、今日はさらに、それらの側面の密接な関連化が進められており、多機能の結合や統合によって、より人間的な機能やロボットの開発がすすめられているのである。

かつてオートメーション化は、人間の労働を奪うものであるという議論や主張がさかんであった。たしかにそれは人間の職場を侵食する危険性をもっている。しかし一方で、それは単純作業や反復運動、危険な作業から人間を解放し、人間に新しい人間的な仕事を開拓するチャンスを与えたのである。「もの」の人間化は、人間にとって敵か味方かという単純な二分法的発想によってとらえられるよりも、その現象なりプロセスが人間にとってどのような意味をもつか、社会において「もの」の人間化が進展していくメカニズム何なのかを理解することが必要であろう。そして当然のことながら、この理解は人間の「もの」化の現象ないしプロセスとの関係のなかでとらえなければならないし、それは人間の「もの」化を防ぎ、人間の人間化を実現する方法を「もの」との関係で再検討する作業と結びついているのである。

第4章 「もの」社会とは何か

以上、「もの」と人間との関係をみてきたが、この章では、「もの」社会をどのように社会的にアプローチしていくのか、その視点なり、視角は何かを考えてみたい。しかし、この作業を始めるにあたって、「もの」社会とは一体どのような社会であるかを明らかにしておかな

ければならない。

すでに述べたように、われわれ人類は、「もの」との関係性を欠いて生存し、生活することはできなかった。人類にとって「もの」は不可欠であった。それは人類社会の発生以来、われわれにつきまといてきたものであり、人類社会は「もの」社会であったといえる。はじめに「もの」ありきといえよう。人類は、自然物である「もの」を食料とし、着るものに作りかえ、住まうための「もの」を作り出した。また、それを作る労働手段を発達させた。人類はこうにして「もの」をつくり出し、「もの」を蓄積し、消費して生活を確保し、それを豊かにしようとした。そして、「もの」に囲まれた生活のなかで、「もの」にかんする技術をはじめ、多くの文明・文化をつくり出したのである。遺蹟や遺物をとおして、われわれは、そこに住んでいた人々の暮らしだけでなく、社会制度、価値観、生活様式、さらに考え方で推測することができる。

このようにたしかに人類社会は「もの」社会であるといえる。しかし、今日「もの」社会とっているのは、生存するために最低限度必要な「もの」だけに囲まれている原始社会や労働手段が未発達な段階での社会を指しているのではない。いまそれらを原初的意味における「もの」社会とっておこう。これに対し、現代の「もの」社会は、「もの」が大量にあふれ、質の高い「もの」に囲まれて生活している社会である。今日は大量生産から多品種少量生産の時代へと変化している。「もの」を生産し、輸送する技術が高度に発達している社会であり、また、それらの「もの」を経済的に可能ならば、いつでも容易に入手し、消費できる社会でもある。そして、このような「もの」によって現代の生活が支えられ、豊かになったが、一方でそれによって人間性が失われ多くの公害が発生し、生活に支障をもたらしているような社会でもある。そして、重要なことは、一見して現代人の生活に不可欠であるようにみえる「もの」が、実は不用なものであり、あるいは有害になったりするような「もの」をわれわれはかかえて生活しているのである。「もの」の無駄使い、不用な「もの」の蓄積、ゴミ処理といった「もの」の廃棄の方法を真剣に考えなければならない社会が「もの」社会であり、また、地球規模では「もの」が極端に不足している社会、食べもの、飲みものがない社会が現存するのである。

狩猟社会と農耕社会と比較すると、農耕社会では「もの」の数が急速にふえる。たとえば、ブッシュマンやピグミーの「もの」を数えてみると、それが明らかになる。彼らの「もの」の所有は狩猟と採集生活に必要な不可欠な数、最少限度に抑えられている。人力による移動によって、「もの」は背負って運べる量に限られる。ある調査報告によると、その数は、79点であるという。それらの中には下半身を覆う衣類、寒さと雨露をしのぐために運搬用の風呂敷を兼ねたカモシカの毛皮の寝具などが含まれる。また、狩猟用具、採集運搬具、住居、調理用具、衣料、装身具、楽器や遊具、これらを作り出すための製作用具がそこに数えられる。それらは、主として動物を原料としている。ピグミーも、ほぼ同数の74点の「もの」しかもたないが、極端

な乾燥と湿潤という自然環境のちがいから彼らの場合、素材は植物である。¹⁴⁾ところで個人ないし家族を基本的な生計の単位とする狩猟採集民社会では、平等主義の原則が徹底しているという。「分配や貸し借りや共同は、きびしい環境で、その日暮らしを送る人びとにとっては、生存のための一種の社会保障だといってよい」とこの報告は述べているが、「もの」が乏しいがゆえに平等主義的な考え方が自然に生じる社会と、「もの」が豊かであるゆえに、骨肉相食むような事件が起こる社会は、果してどちらが人間的であり、幸福であるかを考えさせられる。「もの」社会は、このように、人間性を喪失させる社会であるといえる。

現代社会は、大量生産の技術の発達により、大量の多種類の「もの」に囲まれて生活している。具体的で、可視的な「もの」だけに限定しても、その数は実におびただしい。一例として、商品科学研究所＋C D I（コミュニケーション・デザイン研究所）の『生活財生態学』は、表札から自動車用工具に至るまで1957種の生活と関連する「もの」の所有と使用を調査している。その結果、保有数がもっとも多い家庭は1178品目をもち、もっとも少ない家庭では460品目であり、800品目の家庭が最も多く、44軒で、全家庭に対する割合は、31.4%で、300品目から900品目数を所有する家庭は、104軒で、全体の74.3%である。そして、「平均的な都市生活家庭がもっている生活財の品目数は、およそ800～900ぐらいであるといえる」と述べている。¹⁵⁾

その調査は、空間ステージが多いほど、収入が多いほど（250万円以上）、また、世帯主の年齢が高いほど、「もの」の保有品目数が多い傾向にあること、また、家の広さが大きくなるにつれ品目数は増加しており、持ち「もの」が多くなっていることを示している。また、応接間のあるなしでは、ある方が生活財の保有が多い。（75%）ところが、夫婦共稼ぎの場合、保有品目数は少なく、居住年数が長いほど保有品目数は少ないという興味ある結果を示している。¹⁶⁾

少し古いが、西川勢津子の試案として、家財道具の場所代にかんする調査では、昭和59年当時、1平方メートル23万円で買った家の場合、ミシン一台で場所代が11万5千410円、ピアノが23万円、コップが231円である。ポンと週刊紙を置いておくだけで1万5千800円もかかる」と述べている。日本のような狭い国土、地価の高い国では家財という「もの」の場所代は極めて高価なものであることがわかる。¹⁷⁾狭い土地、狭い家で、「もの」を買い込むことがいかに高くつくか、また、家は「もの」によって占拠され、人間の住まう空間がいかに狭められているか、このことを知りながら「もの」への執着、所有欲が、かきたてられるのである。

「もの」社会 消費社会は、このような「もの」と人間との対立関係を生み出しているといえよう。しかし一方では、既述したように「もの」不足の社会がある。そこで、それらの「もの」不足の社会を含めて、一体、「もの」社会とはどのような社会なのかを社会的にみる視角なり、視点は何であろうか。

第5章 「もの」社会の社会学的視点

「もの」社会を社会学的に見る方法を考えるとき、どの部分に焦点をあてるか。対象について考えてみなければならない。

一般的にそれは、Ⅰ マクロ・レベル Ⅱ ミドル・レベル Ⅲ ミクロ・レベルの三つに大別することができる。そして、各々のレベルは、さらに、Ⅰ 1) 国際的 2) 国家的レベルに Ⅱ 1) 地方的 2) コミュニティ的 3) 大きい組織のレベル Ⅲ 1) 小さい組織・集团的 2) 個人的レベルに分けることも可能である。

Ⅰの国際的・国家的レベルは、全体社会的レベルであって、そこには、「もの」の偏在という現象がみられる。それは、地理的、気象的、地質学的諸条件によって生じると共に、人口数の多寡、人口増加率、都市化の進展、情報化等々の程度によって起こる。それらの諸条件が、各々単独に、あるいは相乗的に作用する結果、「もの」が豊かな社会と「もの」が極端に乏しい国々、そして、その中間的な国々を作り出している。そしてそれは南北問題、あるいは先進国とN I E Sとの対立や協調関係の問題、さらに、南の国々間の発展度によって生じる南南問題を生み出している。

とくに発展途上国の人口増加の加速化は、食糧不足に代表される「もの」不足を激化させている。1985年国連の推計では、地球上の総人口の約75%が開発途上国に住んでおり、そこでの人口増加は食糧不足、「もの」不足の傾向を早めている。1人当たりの所得が、350ドル（1984年時）以下のいわゆる最貧国では、衣食住や教育など、人間としての最低限必要とされるニーズ（Basic human needs）の確保すら困難になっている。

Ⅱのミドル・レベルでも国家内の地域社会間、たとえば、大都市と小都市、農山村 島嶼などでの「もの」の偏在現象がみられる。この原因も自然的環境に加えて経済的発展や、その地域に固有の産業や生活様式等々の相違に求められる。それは地域社会に伝わった独自の「もの」社会を形成しており、その地域の伝統的な生活習慣、生活様式と密着した「もの」である。土産品は、その最たる例であり、地方の祭礼に登場する「もの」をはじめ、その地方に特有の生活用具などにそれをみることができる。

大きい組織・巨大組織では、「もの」の生産・販売・運搬・保管、保全等々に関係する業種や業務内容によって組織と「もの」との関係は複雑であり、多様であるのでその関係を一概に述べることはできない。ただ、バーナードのいうように、組織の有効性（effectiveness）を高める場合、人、カネの管理とともに「もの」の管理が重要である。今日の巨大組織と「もの」との関係は、多国籍企業にみられるように、一方では国際的レベルの関係であり、マクロレベルの問題と結びつき、それがパッカードのいう浪費をつくり出す構造をもち、他方ではミクロ・レベルにおいて個人の「もの」の大量消費に拍車をかけているのである。¹⁸⁾ もちろんこのような「もの」の偏在化、特殊化は、国家レベルの「もの」の生産 流通 消費等々にかんする政策

や制度、および交通 運輸手段の発達などによって一般化し普遍化される傾向がみられるが、このような地域社会の「もの」の一般化現象と共に、特殊化の現象が共存し、同時的に存在しているといえる。

それは、中央に対する地域社会の独自性、センターに対するマージナル・エリアの固有性をあらわすものととらえることができる。そして、このような地域社会・コミュニティの「もの」社会の構造が、国家レベルの単一の統一的な「もの」社会を支えている点も見逃すことができない。多様な地域社会の「もの」構造によって国家レベルの「もの」構造は構成されているといえる。したがって、Ⅱのミドル・レベルの「もの」社会は、Ⅰのマクロ・レベルを支えると共に、ⅠのレベルはⅡのレベルの固有性 特殊性を包括し、統一するレベルであるといえる。ここに、「もの」社会におけるⅠとⅡの対立と共存の二つの現象があらわれる。

Ⅲのミクロ・レベルは 1) 小さい組織・集団的レベルと 2) 個人レベルに分けられるが、ここにおいても、さきに述べたのと同じ現象が、さらに二重三重となってあらわれる。すなわちそれは、A) Ⅲのレベルのなかで 1) 小さい組織・集団的に固有な「もの」と 2) の個人にとって固有な「もの」との関係としてあらわれる。つまり、a) 小さい組織・集団的の中の構成員としての個人は、組織・集団の「もの」構造の中において「もの」と関係する。たとえば、ある企業がある「もの」を生産し、販売するとき、その企業に特有の「もの」との関係をぬきにしては個人と「もの」との関係をとらえることは不可能である。なぜなら個人の労働や生活は、それらの組織・集団の業種 技術 作業等々との関係において展開されているからである。b) しかし、他方で個人の「もの」との関係は、個人独自のものである。彼は組織人ではなく、自動人形ではないのである。特定の「もの」に対する思いやりや、愛情、贈り「もの」に込められた他人の心情の理解、「もの」を介しての人間関係、「もの」の交換による相互関係があるのである。つまり、彼は、個人レベルでの独自の「もの」とのかかわりあいをもつがゆえに、個人は「もの」の独自性、特殊性をもつといえる。

次は、B) Ⅱのミドル・レベルとの関係におけるⅢのミクロ・レベルである。それは、a) ある特定の地域社会・コミュニティの「もの」社会のなかでの組織・集団の「もの」との関係と、b) 個人の「もの」との関係に分けられる。

第三の C) はⅠのマクロ・レベルとの関係においてとらえられるところのⅢのミクロ・レベルの問題であり、ここにもさきと同様に、マクロな国際化、国家レベルの「もの」社会と、a) 組織・集団と「もの」との関係レベルと b) 個人のレベルとの関係レベルを分けることができる。

これらのレベル間の関係は、相互に対立し、矛盾しつつ、相互に依存するという現象を呈している。この点を簡単に説明するため、いま、個人のミクロ・レベルと全体社会的な国家のマクロ・レベルとの関係としてとらえ直してみると、一方で、ミクロ・レベルの「もの」と個人との関係を分析することによってマクロな「もの」社会という全体は説明することはできない。

むしろ個人の「もの」との関係は、「もの」社会という全体の一部としてとらえなければならぬ。なぜなら「もの」社会の「もの」を作り出したものは、個人でなく社会であるからである。ミクロ・レベルの「もの」と人との関係は、このマクロな「もの」社会の中で展開するものなのであり、その中で、個人と「もの」との独自の関係を展開する余地が十分あるのである。その点で、個人は全く「もの」社会に影響され、規定されているのではなく、さきに述べたように、個人は自動人形ではないのであり、個人と「もの」との独自の関係が厳存するのである。

それはレベルの問題であると共に、アプローチの問題でもある。当然それは「もの」社会の社会学的アプローチとも関係する。たとえば、方法論的個人主義的な立場と方法論的集合主義的な立場、行為論的アプローチと構造論的なそれ、社会システム論的なアプローチと生活世界的な現象学的アプローチなど、いくつかの方法を応用することができよう。

一方、「もの」はたしかに個人レベル、行為者としてのレベルとに關係する「もの」であるがゆえに、方法論的個人主義的アプローチや行為論、現象学的アプローチは重要である。しかし他方で、「もの」社会は個人の「もの」との關係に強く影響し、それらを規定する社会であるといえる。資本主義的な「もの」の生産、配分、消費、廃棄システムを度外視して個人の「もの」との関わりあいには理解できない。

前者のように個人の行為に注目すると、「もの」と人との關係は、「もの」の生産（変形、変質） 分配（運搬、伝達） 消費（購売、利用） 管理（蓄積、保存） 廃棄（収集、処理） 交換（譲渡、贈与） 所有（専有、共有）などの行為としてとらえることができる。そしてこれらの行為は、人と「もの」、 「もの」と「もの」、 「もの」とかね、 「もの」と情報などの關係として多重的な様々なタイプのなかでとらえられる。たとえば、ある「もの」の所有は、それが個人の「もの」としての専有の形態である場合もあり、他者との共有の形態である場合もある。後者の場合、その「もの」の共有は 二人あるいは、それ以上の人々の社会關係を前提として成立し、あるいは逆に、「もの」の共有が新しい社会關係を形成する。また、その「もの」の所有が他の「もの」を生産するための道具、手段として利用されたり、されなかったり、分配のための手段として使用されたり、されなかったりする。このように「もの」と人との關係から生じる行為は、あるときには単独の非連続的な關係として、またあるときは、相互に連続する關係として現われるが、そのような関連性を具体化する状況は、「もの」社会の構造に外ならないといえよう。

たとえば具体的に「もの」の所有と使用についてみると、性による区分がはっきりみられ、それがタブー視される社会とそうでない社会がある。ポリネシアではキリスト教が入る以前、男女が共に食事することはタブーであった。食事を共にしないだけでなく男女別火であり、料理も男女別々の炉でおこなわれ、容器も区別されていた。

わが国の場合、男女の茶わん、箸などに大小、長短の区別がみられる。それを女性軽視とみる人もいるが、実はそれは男女の掌や指のサイズにそわせたものであり、触覚の手ごろさなどの

配慮の表われである。

男女分業がはっきりしている社会では、男の労働に使用される「もの」と、女性のそれは区別される。また装身具、装飾具は、女性と密接な関係をもつ。ケニア北部の遊牧民、レンディーレ族では女性はビーズを中心に装飾する。それは装飾品88種類のうち40種類を占めているといわれている。そして、それは抜歯 結婚 出産 長男の割礼といった社会的成長の段階と関連して変化する。また、女性の友人、名称は、装飾品の素材の授受によって16種類もあるといわれている。¹⁹⁾

年令別の「もの」の所有、利用、交換等が区別される社会は多い。新生児のための衣服、幼児服、玩具、はきもの、かぶりものなどは当然、子供の成長にしたがって次第に変わっていく。

すでに述べたように、今日の「もの」社会は、「もの」がたんに人類の発生以来あったという原初的意味での「もの」社会ではなく、「もの」の大量生産 大量消費ができる社会をさしている。つまり、このような「もの」社会はロストウのいう伝統的社会からの離陸 (take-off) 後の社会をさすのである。ロストウは、離陸を「有効な投資率ないし貯蓄率が国民所得のたとえば5%から10%、ないし、それ以上に上昇する」ことを指摘している。²⁰⁾ その指摘は、経済的要因を重視したものである。彼は離陸が始まって、大体 60年後に成熟期の段階を迎え、その段階を経て主導部門が耐久消費財とサービスに中心をおく高度大衆消費時代に到達するとみる。この場合、「もの」の量も質もかなり変わり、人間が「もの」に対してもつ欲望や意味もかなり変化していると考えられる。このような変化をたんに経済的要因だけでとらえることはできない。ここに社会的に「もの」社会をとらえることの必要性が生じるといえる。

このような経済的要因を重視する「もの」社会の分析にたいし、社会学は、「もの」社会の経済的要因とともに、非経済的要因 (noneconomic factors) を重視する立場に立つといえる。いわゆる非経済的要因の内容について、示唆に富むのは、1950年、60年代のかつての経済成長論、産業化の指摘である。たとえば、B.ホゼリッツは、自然的資源と人口数との比率と階層構造の二つの変数をあげ、人口数に対して資源が豊かで、発展した拡大発展型の国とそうでない内部発展型の国とに分けた。また、W.E.ムーアは、1) イデオロギー、2) 制度 3) 組織、4) 動機づけの次元をあげ、A.ルイスは、経済発展と社会制度の両立性を指摘した。²¹⁾

このほかに、非経済的要因が何であるかについては多くの異なった意見が出され、指摘がされているが、それを「もの」社会と関連させて考えてみると、一般的には、人口、制度、職業、階層、文化などの社会構造的要因と主体的な動機、意欲という個人的レベルの要因との交錯としてとらえることができよう。

しかし、このような一般的な要因のなかで、何が現代の「もの」社会にとって重要なものであるかを考えると、「もの」の大量生産さらに多品種少量生産と大量消費を可能にした要因として今日の技術があると考えなければならない。この点を確認したうえで、「もの」社会の経

済的要因と非経済的要因の関連性を、たとえば、さきにあげた B・ホゼリッツが述べたように、経済的要因を第一次的な変数とし、それらの導入に対する社会構造的要因や文化的要因をこの変数に対するプラス、マイナスあるいは中立的な反応としてとらえるかどうかを検討していかなければならないであろう。しかし、この点に言及する紙幅は、ここにはないので、次の章では現代の「もの」社会を形成し、発展させるもっともすぐれた要因としての技術と文化的要因としての価値との関連性の問題にふれてみたい。

第6章 「もの」社会における技術と価値

「もの」社会を社会学的にみようとするとき、いくつかの対象に分けることが可能であり、また異なったアプローチのあることがわかった。その一つは非経済的要因のなかで、「もの」社会を形成し、発展させる原動力ともいうべきものとして技術をとらえ、その前提として「もの」性の意味付与ともいうべき価値の問題に注目する方法である。

そこでこの章では、いままで述べてきたことを土台にして、さらに「もの」社会を社会的にみる一つの試み、あえていえば技術社会学的なアプローチを提示したい。

「もの」は人類の発生とともにその生存と生活に不可欠であった。われわれはこれを原初的な意味での「もの」社会と名づけた。しかしそれがいかに原初的であろうとも、そこに人間と「もの」、社会と「もの」との基本的で主要な問題を見出すことができる。つまり人間の生存と生活にとって不可欠であるということは、人間にとってきわめて主要な意味を「もの」が有しているということであり、人間は「もの」にこの意味を付与することによって生きてきたともいえるからである。

すでに第2章で「もの」の意味を付与する基本として、Ⅰ 主体とかかわりあいをもたぬ「もの」と、Ⅱ 主体とかかわりあいをもつ「もの」に大きく二分したが、それを人間の労働という点からとらえなおしてみると、Ⅰは人間の労働を経ない「もの」、つまり手を加えられていない一般の対象としての「もの」と、Ⅱは食料や生産物などのように現在及び過去の人間の労働を経ている「もの」といいかえることができる。後者のⅡの労働対象としての「もの」には物質だけでなくエネルギー、情報も含まれる。すでにのべたように人間は「もの」を作り、使用する前に、「もの」性を発見する動物である。しかもそれは「もの」の道具性の発見を前提としている。

「もの」性の発見は「もの」の内的特性、「もの」がもともと有する属性の発見にとどまるものでない。それは人間がもつ多様な欲望を充足させるため、その目的を実現させる機能を有した「もの」を作ることによって実現される。そのために人間は自分の身体を道具として、「もの」を作ろうとした。あるいは他人と協働して労働しなければならない。しかし身体には生理的な限界がある。これを越えて「もの」を作ろうとするとき、「もの」を作る「もの」、

いわゆる道具をつくることが必要になった。それは主観的な目的を実現するために手段 (Mittel) を媒介にして客観的な自然、つまり行為の対象に向かって働かせ、所期の目的を実現することである。この場合労働手段は人間と自然との間に媒介として機能する。

ヘーゲルはこれを「理性の狡智」(List der Vernunft) とよんだが、人間は自ら直接ではなく、自然をして自然に働らせて目的を実現するのである。ここに理性が働らいているのである。すなわち道具には「もの」を作るという主体の側の目的が付与されている。素材からみれば道具はあくまで自然物であるが、その機能を目的からみれば、それは主体的である。つまり道具は主体の「作る」行為を代行する機能を有した「もの」といえる。このように道具は主体的意味が付与されており、しかもそれはあくまで客体である。このことは道具の原型がわれわれの身体的器官であることと道具の手段性・媒介性の二つから証明することができる。

R. K. ボックは道具を技術的な機能という点から次の四つに分類している。それはⅠ コンテナ (入れ物)、時間を経て「もの」やエネルギーを蓄えるもの、Ⅱ のメディア (媒介物)、空間を経て「もの」やエネルギーを伝達するもの、Ⅲ セレクター、(選択器)、インプット間の選別、Ⅳ コンバータ (交換器)、「もの」とエネルギーの他の「もの」とエネルギーへの変化である。そして彼はそれらの組合せのタイプとして (Ⅰ' 防御物) Ⅰ / Ⅱ 乗り物 Ⅱ / Ⅱ 機械、Ⅱ / Ⅲ フィルター、Ⅲ / Ⅱ / Ⅱ バルブ、Ⅲ / Ⅰ トラップ、Ⅳ / Ⅱ / Ⅱ エンジン、Ⅱ / Ⅱ / Ⅳ 発電機、Ⅳ - A 分析器、Ⅳ - B 総合器、の10をあげている。²²⁾

この分類はたしかに「もの」と関係する技術的機能に注目した点で意味があるが、人間のニーズから生まれたそれらの機能が、どのように道具に付与されていくかというプロセスについては何も語っていない。また技術的機能とは「もの」やエネルギーを貯え、伝達し、選別し、変型・変質させるという点だけに限られるのではない。技術は「もの」の生産、消費・管理・さらに廃棄の機能と密接に関連している。

しかもそれらの技術は「もの」のハードな側面に関してだけいわれるのではない。「もの」の「もの」性の付与とか道具の道具性の付与といわれることは、実は「もの」や道具の作り方、使い方、消費の仕方、管理の仕方、廃棄の仕方であり、これらにかんするノウ・ハウであり、情報なのである。

K. マルクスが労働手段を重視し、それを人間の労働力の発達を測定するもの (Grad Messer) とのべた。たしかに技術において道具と機械などのハードウェアは重要であり、道具や機械をつくり出す工作機械が技術の発達において大きい役割を果しているのも事実である。しかしこのような道具や機械をいかに作り出すのか、どのようにそれを改良するのか、いかに有効に使用するのかといった考え方、あるいは情報がないと、機械はたんなる「もの」にとどまるであろう。人間は道具を作り使用する動物であるが、その前提として道具とは何かを知っていなければ道具は作れないし、使うことができないのである。

ところで、道具の製作の目的、意味は、たとえば「もの」を作ることにより限定されている。

それは作り出す道具「もの」を作る機能を付与することである。道具性の意味付与があって道具は、はじめて道具となるといえよう。この意味付与は情報の付与にはかならない。くりかえし言うが、何のために、いつ、どこで、誰が、どのように用いるかという情報が道具を道具たらしめるといってもよい。それは道具の汎用性、特殊性の発見である。人間は道具を製作し、使用する動物という規定に先立って、人間は「道具を発見する動物」(a tool finding animal)であるのである。

このように技術の特徴は、たんにハードウェアである労働手段にのみ求められるものではない。技術は方法にかんするソフトウェアの体系・情報の体系である。それは人間は経験から生み出されたカンとコツといった形で蓄積され、伝達される場合もあり、論理的、体系的に叙述されて蓄積、伝達される場合もある。J.エリユールは、技術をさらに経済技術（生産 労働計画など）組織技術（国家 行政 司法 政党 戦争など）、人間技術（教育 職業教育 宣伝 スポーツ レジャー 医療）の三つの領域においてとらえ、総合的に把握しようとしたが、彼は、技術がハードなものにかかわるものだけでなく、より広く人間にかかわる面、とくにソフトウェアに注目したといえよう。

ところで「もの」をつくる「もの」である道具にみられる主体的な意味付与と、「もの」に対する「もの」性の意味付与とは、人間において同じ行為に属する。それらの行為によって「もの」は、はじめて人間にとって「もの」となる。しかしそれはどのようにして社会において「もの」と認められるのであろうか。「もの」の「もの」性の発見は「もの」の価値の発見であり、それは「もの」への価値付与である。俗に「猫に小判」といわれるように、ある人にとっていかに高価なものでも、その「もの」の価値がわからぬ者にはそれは無用の長物にすぎない。「もの」の価値はそれに価値ありと認める主体の判断によって決まる。

しかし一方で、そのような判断は「もの」に固有な属性をはなれておこなわれるのではない。その属性が社会において有用であり、価値があるとする判断主体の価値基準と相互に作用しあった結果、価値ありと決まるのである。「もの」の「もの」性の発見とか意味付与という行為は個人的レベルにおいてなされるが、その背後には、それを規定する時代的・社会的・文化的条件が存在する。そしてそれらは個人に内在化し、個人の行為を方向づけるのである。このようにある「もの」が価値を帯びるのは、それに価値ありと認める判断主体が存在するからに外ならないが、その前提として彼をとりまく社会的・文化的条件、あるいはその社会の価値観、価値意識の基準が存在するのである。

わが国の場合、西欧文化との接触とその受容によって日本社会に固有な伝統的価値観が大きく変化した。また先進国での今日の産業の高度化と大衆消費社会の出現は、かつての資本主義の成立期に力のあったプロテスタンティズムやそこにみられた禁欲主義を惹起せしめ、このエートスに立脚した生活様式やライフスタイルを変化させ、豊かな社会（The Affluent Society）暖衣飽食の時代が出現した。消費は美德となり、使いすてが奨励され、仕事より

余暇、レジャーを重視する考え方が浸透した。このような価値の変化は労働時間の短縮、自由時間の増加、F A O Aによる省力化、高令化、女性の社会進出、高学歴化などの社会諸条件の変化によってもたらされた。そして社会は産業社会の「もの」志向から「もの」離れの方
向に進みつつあるといわれている。しかしその傾向は、たんなる「もの」への志向性から文化的
意味付与された「もの」への志向性への変化という現象としてとらえることもできる。

このような社会的条件の変化にかんする研究は実に多い。また文化的条件あるいは大衆消費
社会の文化的側面の変化についての指摘も多い。たとえば、かつてはT.ヴェヴレンの「有閑
階級論」にみられる誇示的文化としての閑暇と財の顕著な消費にかんする言及をはじめ、J.
K.ガルブレイスが「豊かな社会」のなかでのべた消費の非合理性が無駄な制度化であること
の指摘、A.スウィングウッドの『大衆社会の神話』での消費社会が実は神話をつくり出し、
大衆を支配していることについての分析、パッカードは『浪費を作り出す人々』のなかで、彼
らがアメリカ人の消費的な生活スタイルを強化させるが、他方で、この浪費が消費者の批判的
態度を育成している点を指摘している。またP.ワクラは『豊かさの貧困』のなかで、アメ
リカ人の窮乏感が心理的なものであると指摘し、それを解消するために彼らが豊かさを求めた
ため、かえって窮乏感を深めたという現象をとりあげ、経済的な豊かさよりも、心の豊かさ、
人間らしい生き方が必要であるとのべている。

さらに今日、「もの」の「もの」性を記号論的にとらえようとする意見もある。その一例と
して、J.ボードリヤールは高度に発達した消費社会において、「もの」はたんなる物的・経
済的な「もの」でなく、記号的な存在であるという。彼は「もの」は消費者の生存と生活のた
めの基本的欲求を充足させるためにあるのではなく、これらの経済的属性を超えて、言語のよう
な記号として存在し、社会的・文化的機能を有しているとしている。商品はたんなる「もの」か
ら、文化的記号の意味をもつ「もの」へと変化したのである。

あるいは「もの」は、文化的意味をもつ「もの」となったのである。しかし、「もの」の
「もの」性の付与はまさに文化的意味ではなかったのか。「もの」の記号的意味を理解するた
めに「もの」の「もの」性、「もの」への意味的付与という点をこの小稿ではくりかえしのべ
てきた。「もの」の文化性がなぜ生じるのかを明らかにしない限り、「もの」の文化性・記号
性を指摘しても、その本質は、わからないのではなからうか。「もの」の「もの」性の発見、
「もの」性の意味付与という行為と、それを条件づける時代的・社会的・文化的条件を検討す
ることが「もの」の文化性 記号性について語る前に必要であるといえよう。

この小稿はそのための基本的な問題点を指摘し、「もの」社会を社会学的にとらえるという
視点を明らかにするという作業を提示したにすぎない。

なおこの小稿は昭和62年度・63年度の文部省科学研究費（個別研究）の助成によるものであ
ることを付記しておく。

[註]

- 1) R. J. フォーブス 田中実訳『技術の歴史』岩波書店, 9 頁
- 2) 長坂源一郎「物質」(伊東俊太郎編『現代科学思想事典』講談社 375頁-378頁)
- 3) 渡辺 格『生命科学』NHK市民大学 1985, 1-3 頁, 10-11 頁
- 4) 寺本 英「生命現象の現象論的追究」(『物理学者のみた生命』シリーズ生命科学 I 平凡社 33 頁 1980 年)
- 5) これらの点については於保不二雄『民法総則講義』124-143 頁参照
- 6) Durkheim E., Les formes élémentaires de la vie religieuse (Quatrième édition) Presses Universitaires de France 『宗教生活の原初形態』古野清人訳 上 岩波書店 411 頁
- 7) Polanyi M., Personal Knowledge, Routledge & Kegan Paul 1958 p.55 『個人的知識』長尾史郎訳 ハーベスト社 1985 年 51 頁
- 8) Kant I., Grundlegung der Metaphysik der Sitte (1785 S.57) 『人倫の形而上学の基礎づけ』(『カント全集 第 7 巻』理想社 81 頁
- 9) E. ウイリアムズ『資本主義と奴隷制』中山教訳 理論社 62-63 頁 1978 年
- 10) ジュリアス・レスター著『奴隷とは』木島 始, 黄寅秀 訳 17 頁, 31 頁 1980 年
- 11) Marx K., Das Kapital, Teil I S. 186 長谷部文雄訳『資本論』第 1 部 第二分冊 333 頁
- 12) White L.A., The Evolution of Culture, McGraw-Hill 1959 (Cultural and Social Anthropology, ed. D. S. Hammond) p.409
- 13) 拙著『技術の社会学』ミネルヴァ書房 72-80 頁
- 14) 田中二郎「砂漠に生きる知恵-ブッシュマンの物質文化」国立民族学博物館監修 季刊『民族学』1980, vol 14 92-101 頁
- 15) 商品科学研究所+C D I 『生活財生態学-現代家庭のモノとひと』11 リポート 1980 年 8 頁
- 16) 『前掲書』9-15 頁
- 17) 朝日新聞(昭和54年 1 月30日朝刊)
- 18) 組織の問題については, 谷口茂・倉橋重史共著『現在産業社会と人間』朝倉書店(1989年3月) 第4章「組織と社会」を参照
- 19) 佐藤 俊「ビーズがむすぶ友人関係」季刊『民族学』1979.7 48-54 頁
- 20) ロストウ『経済成長の諸段階』木村, 久保, 村上訳 ダイヤモンド社 昭和40年 12 頁, 53 頁
- 21) この点については拙稿「産業化の形成と科学・技術的要因」(潮見実教授退官記念論文集) (1965 年 5 月)
- 22) Bock P.K., Modern Cultural Anthropology, Borjoi Book, 1969 pp.223-228